

学生・教員の共同によるルーブリック作成の試み

齋藤美香

(キャリア開発総合学科)

I. 問題と目的

聖和学園短期大学 キャリア開発総合学科 介護福祉士養成課程においては、2012年（平成24年度）より仙台市泉区内で学生と地域の高齢者と世代間交流活動を行ってきた。この世代間交流活動（以下、「交流活動」という）は、学生にとって地域課題に目を向け、これからの地域のなかでの自身の役割を意識すること、また社会性や人間関係の構築などさまざまな視点から自己を客観的に見つめる機会となっている。

これまでの学生たちを見ても、地域で暮らしている高齢者と関わりを持つことでコミュニケーション能力の向上や問題解決能力、他者との協働、チーム力、責任感などコンピテンスのようなものが身につけてきていると実感していた。

交流活動の実施にあたっては、興味関心を持ち、積極的な学生がいる反面、授業の一環であっても短大での限られた授業時間内で企画・運営を行うのは困難である。そのため、授業時間外に学生たちが交流活動に取り組むことが不可欠となっている状況がある。この活動を実施するにあたっては、地域のニーズに合わせた時間調整が必要で土日や春季、夏季、冬季休み中に活動が入ることもあり、半強制的にやらされていると感じている学生も一部いるのが現状である。一方で、活動で顔の見える関係（親しい関係）となり高齢者との再会を楽しみにしていることや、企画や運営、喜んでもらえることにやりがいを見つけ

る学生もいる。

このような多様な思いを抱いている学生たちに対して、活動に目標ややりがいを持つこと、自信を持つこと、また、この活動を実施する意味、この活動をとおして将来像を描いていけるような工夫が必要であると考える。

この約10年間の交流活動に至っては、学生の評価について学生自身の活動への参加態度や活動後の感想や考察のレポートを提出してもらうのみで教員側だけの評価方法であり、学生の成長を図る分析までには至らなかった。

交流活動は、介護福祉士を目指す学生はもちろん、一般の学生たちにも大人へと移行していく時期に世代を超えた人たちと関わることは、机上では学ぶことのできない有意義な経験になることは言うまでもない。また、この経験がその後の進路選択にも関わることにもなるだろう。

世代間交流活動をこの研究の対象にした理由として、世代間交流活動は授業で学んだ知識や技術を実践的に活かす活動としているからである。地域の実践の場で今までの学習成果が試される機会ともなる。また、この活動では、自主的・能動的に取り組む姿勢が求められる。その意識を高めてもらい、実践するからにはきちんと目標を掲げ、達成感を味わい、また次の実践に役立つ可視化できる評価のシステム作りが必要であると考えた。

そこで、学生がルーブリックを作成し、そのルーブリックを用いて、世代間交流活動に

対して理論と実践の自己評価をすることは自分の自立的動機づけの内在化を促進すること。

また、レーダーチャートを可視化し、学生が何を学び、何が身に付き、何が身についていないかについて客観的にとらえる機会になると考える。この研究において、ルーブリックを活用することにより、世代間交流活動において学生自身が目的やその意味をつくりだし、能動的な活動に結びつくことで学生たちの意識や姿勢、この活動に参加する意味に変化が現れるのではないかと考えた。

Ⅱ. 文献および先行研究によるルーブリック作成のねらいと学生と作成する意義

ダネル・スティーブンスとアントニア・レビ(2014)は、最も単純な言い方をすれば、ルーブリックとは「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」である。ルーブリックは、ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもので、様々な課題の評価に使うことができると述べている。

さらに、授業にルーブリックを使う理由として、ルーブリックは時間を節約し、教育・学習の過程において効果的な役割を担う可能性があるとし「タイミングの良いフィードバック」「学生による詳細なフィードバックの活用」「批評的思考力のトレーニング」「他者とのコミュニケーションの活性化」「教員の教育思考力の向上」「平等な学習環境作り」の6つをあげている(ダネル・スティーブンスとアントニア・レビ, 2014)。

本研究では、学生参加型ルーブリックの5つのモデルのうち、学生と作成するルーブリックを取り入れ実施した。

ダネル・スティーブンスとアントニア・レ

ビ(2014) 学生と作成するルーブリック作成を授業に取り入れることのメリットは3つあると示されている。

1つ目は、学生の課題への取り組みが、学生側の誤解や理解不足によって評価につながらないという事態を回避できる。学生にとっても有益であるし、評価を行う教員にとっても望ましいことである。

2つ目は、教育の過程で学生自身が「主人公」であるという自覚を高める。このことで学生は、与えられた課題にもっと真剣に取り組み、学習に専念する立場にあるという自覚や創造力も高めることができる(Lewis, R., Berghoff.P., & Pheeny, P.1999)。

3つ目は、教員の仕事の一部、つまり評価方法の一部を学生に作成させることによって仕事量を軽減できる。

どこまで学生に任せるかについては、ルーブリックという評価方法を作成する主導権を学生に譲り渡すことに対する教員の抵抗感、学生のレベル、課題の目的、課題の重要性、その課題に割こうとしている授業時間などによって変わる。課題に取り組みせる前に、すでに完成したルーブリックを学生に読ませて議論させるという程度であっても、学生をルーブリックの作成に関与させることは可能であると述べている(ダネル・スティーブンスとアントニア・レビ, 2014)。

学生がルーブリックを作成する意義について報告した先行研究がある。遠海友紀ほか(2012)は、大学におけるプレゼンテーションの学習活動で、プレゼンテーションを評価するためのルーブリックを一部の学生に作成させている。そこでは、教員がルーブリックの「授業で到達すべきB基準」と「Bに到達しないC基準」を提示し、学生にB以上の評価基準を検討させている。授業後、学生に自由記述でアンケート調査を行い、質的に分

析したところ「自分たちで学習の目標となるルーブリックの内容を作成したことで、目標を意識し、課題に対する動機付け／責任感を持って学習活動を行っていたことがわかった」と報告している。また、碓山・木村（2017）は、多様な他者と協働して活動を行うために何が求められるかを焦点としたルーブリックを学生主体で作成し、自己評価させることによってグループ活動へのコミットメントを引き出す試みを行った。その結果、他者への配慮や相互関係の活発化に一定の効果があることが示唆されたと報告している。山本美紀・植野真臣（2013）は、「学習者がルーブリックの作成に参加することによって、学習に対する内発的価値が高められ、動機づけを向上させる」と述べている。これらの先行研究から、学生がルーブリックを作成することは、学習に対する動機づけを向上させる効果があることが期待される。

多様な地域の高齢者と協働して、企画・運営を行ううえで、何が求められるのかを焦点としたルーブリックを学生と作成し、自己評価を試みることにした。

世代間交流活動にルーブリック評価を取り入れる目的は、以下の4点である。

- ① 学生間の相互作用を促進すること。
- ② 見えにくい能力（汎用的能力）を可視化すること。
- ③ 福祉マインドを持って活動しているか否か、それがいかに培われたか。福祉マインドきちんと身につけているのか。
- ④ 大学内では体感が難しい他者との協働、地域との協働、問題解決能力、応用力、コミュニケーション能力など社会的能力を判断（身に付ける）すること。

Ⅲ. 研究計画

1. 対象及び内容

学校法人聖和学園 聖和学園短期 大学キャリア開発総合学科 介護福祉士養成課程の2020年度(令和2年度)入学生 2年生6名(男子学生2名、女子学生4名)、平均年齢19.7歳(2021年11月1日現在)である。

試行Ⅰとして世代間交流活動「学生・教員の共同によるルーブリック評価表の作成」を2021年7月27日(火)～2021年9月21日(火)の期間で「介護総合演習Ⅱ」「アクティビティ概論」の授業時間に実施した。

試行Ⅱとして、評価の試行を実施した。

2. 倫理的配慮

研究対象の6名の学生に研究の目的、個人名は公表しないこと、記述内容は成績評価に一切関係しないことを口頭で説明し、同意を得た。

Ⅳ. 実施・評価

1. 試行Ⅰ・世代間交流活動「学生・教員の共同によるルーブリック評価表の作成」を2021年7月27日(火)～2021年9月21日(火)に実施した。

交流活動について、学生同士また世代を超えた地域の高齢者と協働して活動を行うために何が求められるのかを焦点としたルーブリックを学生主体で教員と一緒に作成し、自己評価を試みた。さらに、この交流活動をとおして、卒業時の将来像について自己目標を設定してもらうことにした。

【補足】

※2021年(令和3年)5月下旬まで宮城県においては県・市独自の緊急事態宣言が発出されており、世代間交流活動の再開が不透明な状況だった。緊急事態宣言が解除され、

まもなくして2021年（令和3年）6月2日（水）に今年度1回目の世代間交流活動を実施することとなった。そのため、ループリック作成がこの時期となった。

ループリックの作成には、以下5コマ（450分）を設定し、次のような手順で行った。

・1回目 2021年7月27日（火）0.5コマ（45分）評価項目の整理①

交流活動の評価について、学生たちが主体となり教員と共同して作成すること、ループリックを導入した経緯の説明を行い、合意形成を図った。そして、ループリックの説明、参考となる既存のループリックを提示した。交流活動を行っていくうえで、自身及びグループで必要だと思う知識や技術、姿勢や態度などについて、次回までに各自考え、それをメモにして持参することを課題とした。

・2回目 2021年8月3日（火）1コマ（90分）評価項目の整理②

KJ法を用い、学生たちにポスト・イットを配布し、各自が考えメモしてきた自身及びグループで必要だと思う知識や技術、姿勢や態度などを1枚のポスト・イットに1つずつ書いてもらう。合計30枚程が提示された。特に参加態度に関する記述が多く挙げられた。全員が書き出したら、学生が記載したポスト・イットを読み上げながらテーブルに貼り、学生たちと教員は全員のポスト・イットに目を通す。その後、関連性のあるものをそれぞれグループになるようにテーブルに貼り直す作業を行う。さらに、活動に関係ない内容を削除、表現を修正しながら、類似性・相違性の視点で取捨選択していった。教員は、指摘はせず方向性を整え、ヒントを出し誘導した。そして、枠のみのループリック白紙を配布し、手書きで各自記載してもらう。ある

程度まとまりがついたところで、教員が読み上げながら学生6名全員に合意形成を図った。

教員は、絞り込まれたポスト・イットをもとに学生たちが作成した手書きのものをエクセルで作成し、ループリック「学生・教員の共同によるループリック評価表2021・試作版1」（以下、「試作版1」とする）とした。

・3回目 2021年8月10日（火）1コマ（90分）仮評価

試作版1（3段階評価）について学生たちに提示し、2021年6月2日（水）のインタビューを思い出してもらいながら仮評価を実施。学生たちが感じた違和感やズレ、評価しづらい内容を確認、また学生から提案があり、数ヶ所修正した。

この試作版1は、主に参加態度に関する記述や対人援助に必要な記述が多く見られた。そのため、さらに評価の視点を広げるために、活動地域の理解や対象者についての理解、また活動後の振り返りの必要性の有無等、学生が気づかなかった項目について問いかけやヒントを出したり、ときには提案をして、学生たちと対話をしながら進めていった。さらに教員からも数ヶ所の修正や削除の提案をした。最終的に学生から出された項目を「活動地域の理解」、「企画・運営・課題解決能力」、「参加態度」、「チームメンバーとの連携」の4区分に整理した（表1 学生・教員の共同によるループリック評価表2021（区分・項目））。修正点について学生6名全員に合意形成を図った。

評価基準については、Aは3点、Bは2点、Cは1点と3段階評価とした。修正して評価基準を記述し、「学生・教員の共同によるループリック評価表2021」（以下、試作版2とする）とした。

表1 学生・教員の共同によるループリック評価表2021（区分・項目）

区 分	NO	項 目
活動地域の理解	1	活動地域の特徴を理解している
	2	地域の方の要望や課題を把握し、ニーズに応じた提案ができる
企画・運営・課題解決能力	3	学生が主体となって企画・運営・課題解決ができる
参加態度	4	相手を敬う気持ちを持って接することができる
	5	コミュニケーション技術を活用しながら地域の方と関わっていくことができる
	6	地域の方との馴染みの関係を築くことができる
	7	地域の方に楽しんでもらえるような雰囲気作りができる
	8	視野を広く持ち、臨機応変に対応できる
	9	自分の役割に責任を持って最後まで取り組むことができる
チームメンバーとの連携	10	チーム内での連携（報告・連絡・相談）ができる
	11	チーム内で意見が出しやすい雰囲気作りができる
	12	活動を振り返り、課題を発見し、次の活動に繋げることができる

・4回目 2021年8月24日(火)1.5コマ(135分) 仮評価

「試作版2」（3段階評価）について学生たちに提示。再度、2021年6月2日（水）のインタビューを思い出してもらいながら、仮評価をしてもらった。違和感やズレ、評価しづらい内容の有無を確認した。仮評価の結果、学生の評価に偏りが生じたため、3段階評価から5段階評価に修正した。

評価項目1～12に対して、学生が共通理解できるよう、具体的でわかりやすい表現を検討し、視点のポイントから適正に評価できるようそれぞれの項目について丁寧を示した（表2 学生・教員の共同によるループリック評価表2021、試作版3（項目・評価の視点）。これを（以下、試作版3とする）とした。

表2 学生・教員の共同によるルーブリック評価表 2021（項目・評価の視点）

NO	項目	評価の視点
1	活動地域の特徴を理解している	地域の歴史・概況・資源・文化・生活などが説明できる
2	地域の方の要望や課題を把握し、ニーズに応じた提案ができる	①地域の方の要望に耳を傾ける ②解決策を考えることができる
3	学生が主体となって企画・運営・課題解決ができる	要望や課題から解決策を考えることができる
4	相手を敬う気持ちを持って接することができる	①相手を尊重する ②正しい言葉遣い（敬語）ができてい ③適切な距離を保つ
5	コミュニケーション技術を活用しながら地域の方と関わっていくことができる	①視線を合わせる ②相手の聞き取りやすい声で話す ③身振り手振りを活用
6	地域の方との馴染みの関係を築くことができる	④反応を観察 お互いの特性を理解している
7	地域の方に楽しんでもらえるような雰囲気作りができる	①穏やかな表情 ②場に合った声のトーン・大きさで話す
8	視野を広く持ち、臨機応変に対応できる	①周りに注意を払うことができる ②その場の状況に応じた行動ができる
9	自分の役割に責任を持って最後まで取り組むことができる	①自分の役割を理解している ②率先して行動に移すことができる ③期日を守る
10	チーム内での連携（報告・連絡・相談）ができる	チーム間での情報共有ができてい
11	チーム内で意見が出しやすい雰囲気作りができる	①メンバーの発言に耳を傾けどんな意見も否定しない ②メンバーの意見に対して反応する
12	活動を振り返り、課題を発見し、次の活動に繋げることができる	活動後は、褒めあい反省点をチームで話し合い、改善点を次の活動に活かすことができる

・ 5回目 2021年9月21日（火）1コマ（90分）

「試作版3」の評価基準をS = 5点、A = 4点、B = 3点、C = 2点、D = 1点の5段階評価とした。また、卒業時の将来像について自己目標を設定することにし、最終区分に「自己目標の達成度」(F)、項目：世代間交流をとおして最終的な自己目標を加えた。

さらに、コメント欄とフィードバック教員記入欄を加えた。コメント欄には、学生が評価を行うにあたり目安となる基準となった出来事などを記載してもらったことにした。

フィードバック教員記入欄は、学生とフィードバックの際に教員がメモ欄として使用することとした。

学生からの発言や学生が加筆・修正等なく、完成とした。表3が完成した「学生・教員の共同によるルーブリック評価表 完成版 2021」である。

ルーブリック評価表の作成においては、教員が一方的に指導するのではなく、学生たちが全員で評価の項目や視点が共通理解できるよう、具体的でわかりやすい表現を検討、確認しながら考案し、用いた。

表3 学生・教員の共同によるルーブリック評価表 完成版2021

区分	NO	項目	評価の視点	評価基準					コメント	フィードバック 教員記入欄
				S (5)	A (4)	B (3)	C (2)	D (1)		
活動・運営・課題解決能力	1	活動地域の特徴を理解している	地域の歴史・概況・資源・文化・生活などが説明できる							
	2	地域の方の要望や課題を把握し、ニーズに応じた提案ができる	①地域の方の要望に耳を傾ける ②解決策を考えることができる							
	3	学生が主体となった企画・運営・課題解決ができる	要望や課題から解決策を考えることができる							
	4	相手を敬う気持ちを持って接することができる	①相手を尊重する ②正しい言葉遣い（敬語）ができる ③適切な距離を保つ							
	5	コミュニケーション技術を活用しながら地域の方と関わっていくことができる	①目線を合わせる ②相手の聞き取りやすい声で話す ③身振り手振りを活用 ④反応を観察							
	6	地域の方との馴染みの関係を築くことができる	お互いの特性を理解している							
参加態度	7	地域の方に楽しんでもらえるような雰囲気作りができる	①穏やかな表情 ②場に合った声のトーン・大ききで話す							
	8	視野を広く持ち、臨機応変に対応できる	①周りに注意を払うことができる ②その場の状況に応じた行動ができる							
	9	自分の役割に責任を持って最後まで取り組むことができる	①自分の役割を理解している ②率先して行動に移すことができる ③期日を守る							
	10	チーム内での連携（報告・連絡・相談）ができる	チーム間での情報共有ができている							
チームメンバーとの連携	11	チーム内で意見が出しやすい雰囲気作りができる	①メンバーの発言に耳を傾けどんな意見も否定しない ②メンバーの意見に対して反応する							
	12	活動を振り返り、課題を発見し、次の活動に繋げることができる	活動後は、褒めあい反省点をチームで話し合い、改善点を次の活動にかすことができる							
自己目標の達成度	F	※世代間交流を通して最終的な自己目標	活動における達成感							

2. 試行Ⅱ・評価の試行

2021年（令和3年）年10月～2021年（令和3年）12月までに3回実施した交流活動について作成したループリック評価表を用い、活動ごと（表4）に3日以内に評価を行った。

本稿では、ループリック評価の結果をレーダーチャート化したもののみを掲載する。

図1は、学生6名の交流活動3回についての「学生・教員の共同によるループリック評価表完成版2021」を用いた結果である。活動1回ごとにループリックをもとに学生と教員でフィードバックした。評価基準のS（5点）、A（4点）、B（3点）、C（2点）、E（1点）

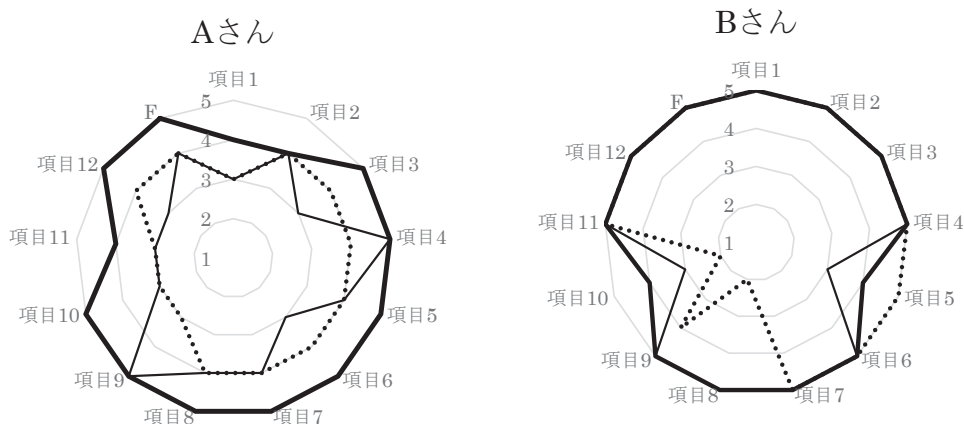
点）と記した項目について学生のコメント・聞き取ったインタビュー内容を記述する。

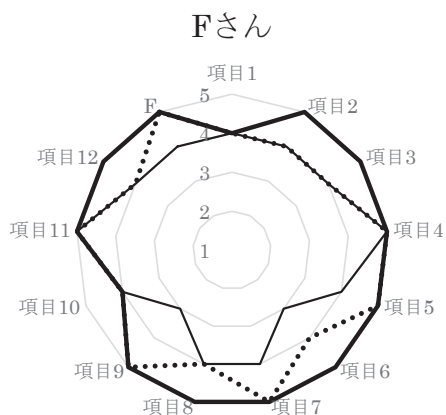
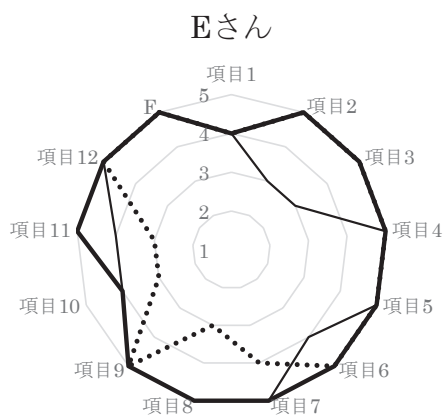
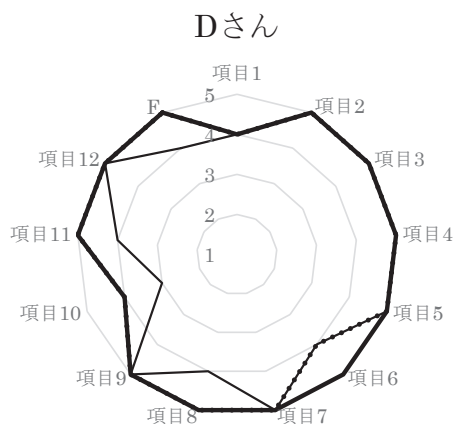
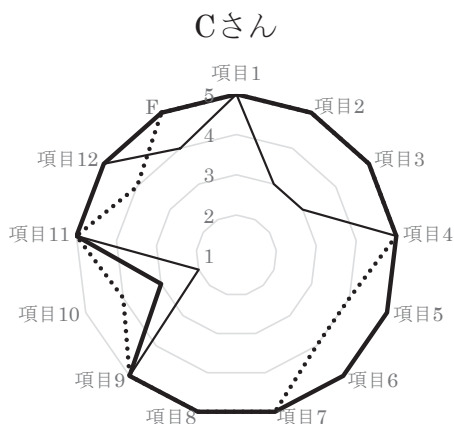
2021年（令和3年）12月21日（火）までに3回実施した活動についてのレーダーチャートを6名それぞれに提示し、全体でフィードバックを行った。レーダーチャートの広がりを見て、自分たちで作成したループリックのそれぞれの項目について自身の成長と苦手な項目を視覚的に実感・自覚し自身の特徴をつかむ機会とした。各自の結果を踏まえ、4回目の活動を効果的なものとなるよう促した。

表4

回数	活動内容	活動日	評価日
1回目	グラウンドゴルフ	2021年10月5日(火)	2021年10月5日(火)
2回目	絵手紙教室	2021年11月18日(木)	2021年11月19日(金)
3回目	クリスマス会	2021年12月23日(木)	2021年12月23日(木)

図1 完成版2021による評価の結果





..... 2021/10/5 グランドゴルフ —— 2021/11/18 絵手紙教室 —— 2021/12/23 クリスマス会

項目 1	活動地域の特徴を理解している	項目 8	視野を広く持ち、臨機応変に対応できる
項目 2	地域の方の要望や課題を把握し、ニーズに応じた提案ができる	項目 9	自分の役割に責任を持って最後まで取り組むことができる
項目 3	学生が主体となって企画・運営・課題解決ができる	項目 10	チーム内での連携（報告・連絡・相談）ができる
項目 4	相手を敬う気持ちを持って接することができる	項目 11	チーム内で意見が出しやすい雰囲気作りができる
項目 5	コミュニケーション技術を活用しながら地域の方と関わっていくことができる	項目 12	活動を振り返り、課題を発見し、次の活動に繋げることができる
項目 6	地域の方との馴染みの関係を築くことができる	F	各自の交流を通しての最終的な自己目標
項目 7	地域の方に楽しんでもらえるような雰囲気作りができる		

2021年12月23日（木）の交流活動後（クリスマス会）に行った自己評価を終えた対象学生6名に質問紙調査を行った。ルーブリックの作成と自己評価について、賛成や反対および意見を自由記述で記載してもらった。以下に自由記述の意見を示す（記載は原文のまま）。

- ・「自分のできていない部分を思い出すことができ、次回は改善できるように頑張ろうと思える。できていない部分を見つけるが、次の回で忘れてしまう。自分が苦手なところが分かった。苦手な部分を見て、次頑張ろうと思った」（Aさん）
- ・「自分自身が次回の活動でどのように動くべきか判断・予想ができる。チームとしての活動としてみて、ベストを尽くすことができる。よりよい活動にするための早見表として使える。見るべき・気を付けるべきポイントを確認することができる。改善点が見つかる。レーダーチャートを見て自己分析ができる。コミュニケーションが苦手であることが再確認できた。介護福祉士として働くときに気を付けることを再確認できる」（Bさん）
- ・「項目と評価の視点が明確になっているため、意識して活動していることがある。評価項目を気にして、参加するようになった。評価を気にしていることにより、積極的な行動が増えた。点数があるため、やらされている感がある」（Cさん）
- ・「目標を持って取り組むことができる。みんなで話し合っただけで評価を決めたので、自分で考えていなかったことにも気づくことができた。活動に夢中になっていると目標や評価のことを忘れてしまう。目標を達成しようとして意識が高まった」（Dさん）
- ・「自分に足りていないところを把握できる。目標を意識して取り組める。項目を意識し

て取り組んでいるため、活動に積極的に参加できている。強制的に感じている人もるように感じる。理由は、活動の話し合いの際に賛成・反対も言わない、他人まかせ的な人もいる。自分の意見をなかなか言えない人には、その人を受け止め、意見を出しやすい雰囲気や意思を確認する質問をするなど対応できた」（Eさん）

- ・「評価項目を気にして参加するようになった。自分のできていない面が見える。活動をしっかり振り返ることができる。自分の役割に責任が持てる。自分を振り返って評価できる。過去と見比べられる。レーダーチャートでフィードバックすることによって自分の弱点がわかる。できていない部分を見つけるが、次の回で忘れてしまう。自分の主観になってしまう」（Fさん）

6名全員がポジティブな意見を複数挙げていた。この交流活動においてルーブリック評価表を用いることにより、活動に対する目的意識をきちんと持てたこと、活動内容や役割分担にもよるが、自身の得意不得意分野が明らかになったこと、さらには、自己目標を定めることにより、活動が活発になり、能動的に取り組むことができたことなどを含めると一定程度の成果はあったといえるのではないかと実感している。一方、その他の意見として、点数で評価をするという点において、やや強制的な感覚を持つ学生も1名いた。また、ルーブリック評価表そのものに対してではなく、一部の学生の活動態度から見て活動自体への取り組み姿勢に対しての意見も挙がった。

V. 考察

交流活動におけるルーブリック評価表の作成は、行動能力を判定する指標として学生と

教員が共同し、評価の項目や視点を検討しながら考案した。対象学生が介護福祉士を目指していることもあり、評価の項目や視点は、介護実践に必要な態度に関する知識や技術面が多く提案される傾向があった。

そこで教員は、学生が気づいていない視点である、交流活動に参加される方々の対象地域の課題やチームメンバーとの連携等の必要性について適宜投げかけたり、ヒントを出した。また、学生ができる限り偏りが生じない評価の視点になるよう、学生ひとりひとりに確認をとりながら時間をかけて進めた。

そして、ルーブリック評価表の最下段に交流活動をとおしての最終的な自己目標を掲げてもらった。

完成したルーブリック評価表は、教員側が考える達成課題がおおよそ反映された内容となった。

教員の作成した評価表を一方的に提示するのではなく、教員と学生が作成過程を共にし、学生が評価の項目や視点を提案し、決定することにより、地域への興味・関心の向上、交流活動の目的や必要とされる達成課題についてあらためて認識する機会となった。認識することで、多様な人との直接的な触れ合いや様々な活動の体験、自身の態度や行動などについて見つめなおす時間となったのではないかと考える。

今までの学習成果が試される貴重な機会ともなるこの交流活動を有意義なものにするため、作成したルーブリック評価表を用いて、全3回の交流活動を評価した。

ルーブリック評価と個別フィードバックの実施については、記憶が薄れないよう、交流活動終了後から3日以内に実施した。

個別フィードバックにおいては、学生一人あたり約5分から10分程度の時間を費やした。自信がなく控えめに評価やコメントをし

ている学生には、学生の活動時の様子を伝え、アドバイスをを行い、次の交流活動がポジティブに自信をもって行動できるよう丁寧なフィードバックを行った。また、学生とフィードバックという対話の時間を設けることにより、教員自身が授業や学生たちとの関わりを振り返り、教育内容の見直しにつながる機会にもなった。

一方で、個別フィードバックを行う実践的教育を進めるには教員の労力を要する。コメントの数、内容の考察、学生の交流活動の取り組み姿勢等による関わり方の多寡によって、教員の負担が増えるものと考えられる。さらに、大人数の場合には、学生ひとりひとりに対応しきれないデメリットが考えられるため、有効な手法の確立を検討していく必要があるといえる。

また、ルーブリック評価や個別フィードバックは、タイミングよく実施できない場合も想定し、活動の様子を録画する必要性も考えられた。

今回の研究対象とした学生は、介護福祉士養成課程の学生で6名のみの少人数である。日頃の様子を観察する限り、6名全員が将来は介護福祉士を目指していることもあり、様々な取り組みへの志が高い。また、リーダー的存在の学生がおり、まとまりがあるように見受けられる状況だった。この状況でルーブリック評価表を作成し、使用したことは、対象学生の実状にあった利用ができたと思われる。

また、この交流活動において、その評価の項目や視点的認識が学生たちに意識づけられ、主体的かつ能動的な実践へと結びつき、自律的学習を促すツールとして、有用性が高いと考えた。

しかし、このルーブリック評価表の手法を活かしたい対象者の中には、半強制的にやら

されている感をもっている、また関心度の低い学生もいる。その場合においては、活動に対する動機付けを促すような授業デザインと交流活動をとおした成功体験、そして意欲が掻き立てられるようなポジティブ性のある教員のフィードバックが必要であろう。

筆者は、高等教育機関においては、「自ら考える」「自ら学ぶ」姿勢が必要と考えている。

多様化する学生のレディネスに応じた指導や対策が必要不可欠となっており「自ら考える」「自ら学ぶ」姿勢をどのように意識づけるか、交流活動をはじめ、さまざまな科目において「授業づくり」が重要になっていると考えている。机上での科目は、知識や理解度で数値化できる。しかし、交流活動のように授業で学んだ知識や技術を実践的に活かす授業において、その能力をどのように評価するかは学生にとっても教員にとっても難しい問題であると感じている。今後は、ルーブリック評価表を使用したシステムを構築していくために、1年次から使用し、自分の得意・不得意がある程度まで視覚的・客観的に知ることができるようにしたい。そして、1年間でどのように成長したかを自覚する機会とし、2年次には1年次を上回る成長を期待したい。

本研究の対象は、介護福祉士養成課程の学生を取り上げて検証を進めてきたが、すべての教育課程でルーブリック評価表の作成が可能であり、ルーブリック評価表を用いることにより、学習者の主体形成を促していく展開に有効であると筆者は考える。

今後は、一般学生を対象にルーブリック評価表を作成し、入学後から卒業までの2年間をとおしての評価の追跡、半強制的にやらされている感をもっている、関心度の低い学生への有効性について研究をすすめていきたい。

また、今回学生が行った3回のルーブリッ

ク評価表をもとに結果をレーダーチャート化し、広がりを見ることで自身の傾向や特徴、成長を実感してもらえるように可視化し、学生に提示した。「ルーブリック評価表完成版2021」による評価の結果の可視化と分析については、今後検討を重ねていきたい。

VI. 文献

- ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ (著). 佐藤浩章 (監訳). 井上敏憲・俣野秀典 (訳). (2021). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』. p2. 玉川大学出版部.
- ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ (著). 佐藤浩章 (監訳). 井上敏憲・俣野秀典 (訳). (2021). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』. p38-39. 玉川大学出版部.
- ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ (著). 佐藤浩章 (監訳). 井上敏憲・俣野秀典 (訳). (2021). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』. p38-39. 玉川大学出版部.
- Lewis,R.,Berghoff,P., & Pheeney. P. (1999). Focusing students:Three approaches for learning through evaluation.Innovative Higher Education, 23 (3), 181-196.
- ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ (著). 佐藤浩章 (監訳). 井上敏憲・俣野秀典 (訳). (2021). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』. p38-39. 玉川大学出版部.
- 遠海友紀・岸磨貴子・久保田賢一. (2012). 「初年次教育における自律的な学習を促すルーブリックの活用」『日本教育工学会論文誌』36 (Suppl).
- 碓山恵子・木村尚仁. (2017). 「学生の協働意識を引き出す学習者主体のルーブリック作成と自己評価の試み」『北海道科学大学研究紀要』第43号(平成29年)研究報告.
- 山本美紀・植野真臣 (2015). 「構成主義的学習におけるルーブリックの活用方法が学習者に与える影響分析－目標志向性, 学習観, 動機づけ, 学習方略, 学習課題成績に着目して－」. 『日本教育工学会論文誌』39 (2).
- ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ (著). 佐藤浩章 (監訳). 井上敏憲・俣野秀典 (訳). (2021). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』. p2. 玉川大学出版部.

- ダネル・スティーブンス,アントニア・レビ (著),
佐藤浩章 (監訳), 井上敏憲・俣野秀典 (訳).
(2021). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』. p38-39. 玉川大学出版部.
- HIGGINS, E. T. (1997) Beyond pleasure and pain.
American Psychologist, 52 (12)
- IDSON, L. C., and HIGGINS, E. T. (2000). How
currentfeedback and chronic effectiveness.
- 碓山恵子・木村尚仁. (2017). 「学生の協働意識を引
きだす学習者主体のルーブリック作成と自己評
価の試み」『北海道科学大学研究紀要』第 43 号(平
成 29 年) 研究報告.
- IDSON, L. C., and HIGGINS, E. T. (2000) How
currentfeedback and chronic effectiveness
influencemotivation: Everything to gain versus
everything to lose. *European Journal of Social
Psychology*, 30 : 538-592.
- Lewis,R.,Berghoff,P., & Pheeny,P. (1999) .Focusing
students:Three approaches for learning through
evaluation.*Innovative Higher Education*, 23 (3),
181-196.
- Newman S. History and evolution of intergenerational
program. Newman S. Ward CR. Smith TB. et
al. (Eds.). *Intergenerational programs: past.
Present. and future.* Washington DC: Taylor.
& Francis. 1997. Preface. p.xi.
- 西片裕. (2019). 「学生がルーブリックを作成して自
己評価することの効果－自律的動機づけの内在
化に着目して」『日本教育工学会論文誌』43 (3).
- 遠海友紀・岸磨貴子・久保田賢一. (2012). 「初年次
教育における自律的な学習を促すルーブリック
の活用」『日本教育工学会論文誌』36 (Suppl).
- 山本美紀・植野真臣 (2015). 「構成主義的学習にお
ける ルーブリックの活用方法が学習者に与える
影響分析－目標志向性, 学習観, 動機づけ, 学
習方略, 学習課題成績に着目して－」. 『日本教
育工学会論文誌』39 (2).
- 湯川恵子,木村尚仁,碓山恵子(2016)「学びへのコミッ
トメントを引き出す学習者主体のルーブリック
作成と自己評価」『国際経営フォーラム』Vol.
27. (2016). Received 12th November 2016.